

## われわれは自閉症児の心を理解しているか

小林隆児

## はじめに

編集部から筆者に与えられたテーマは「広汎性発達障害児は他者の心を理解する」であった。この依頼の意図は、自閉症の「心の理論」障害仮説をはじめとして昨今の自閉症研究では脳障害ばかりに関心が集まり、自閉症の子どもたちは他者の心が分からないかのような言説が流布している現状に対して私見を述べることにあるのではないかと思う。

しかし、筆者はこのテーマをそのまま引き受けるこ

とに多少のためらいがあった。それはなにかといえ「理解する」ということばに引つかりを感じたからである。通常、「理解する」ということは、頭で理解する、知的に理解する、といったふうに考えられている。

問題はここで、「頭では分かっているけれども身体がついていかない」「話は分かるが、どうも腑に落ちない」などの体験的な言辭に示されるように、理解の水準には二重性が孕まれていることに気づかされる。身体水準で理解すること、知的水準で理解すること、この二重性である。

● ● ●  
心の理論障害仮説に対する  
いくつかの疑問

「心の理論」障害仮説 (Baron-Chen et al, 1988) は、自閉症の子どもたちが他者の心の動きを類推したり、他者が自分とは異なった信念を持つ存在であることを理解することが難しく、それが彼らの基本障害だとするものであるが、この仮説に対する筆者なりの疑問については、すでに他の機会に述べたことがある (小林、二〇〇四、小林、印刷中)。

その要点は以下の通りであった。

第一に、この仮説の中心をなす実験パラダイムは「サリーとアン」課題であるが、この種の実験課題に共通していることは、被験者に話しことばを用いて課題が提示されていることである。当然そこではことばの共通理解が前提となっているが、自閉症の言語認知障害の本質は、言語認知機能の獲得過程そのものにあることを考えると (小林、二〇〇四)、われわれ共通の文化の産物であることばを用いて課題を提示すること自体が、問題の本質からはずれた接近方法ではないかということである。自閉症の子どもたちがこの種の課

題提示を知的に理解することに困難を示すことが多いことは確かであるとしても、その結果のみから自閉症児が他者の心 (の動き) を理解できないと即断することはできないのではないかとということである。

第二に、自閉症 (に限った話ではないが) の子どもたちはわれわれの心のありようと (肯定的にも、否定的にも) 深くつながりながら生きていくことの現実をまったく考慮にいれていないことである。自閉症の子どもたちと養育者ないしわれわれとの関係の機微を詳細に観察すると、いかに彼らが場の雰囲気や他者の心の動きに敏感に反応しているかに気づかされ、驚かされる (小林、二〇〇七、小林・原田、二〇〇八)。彼らが知的には他者の心を理解することに困難があるとしても、身体 (情動) 水準では、つまり情動的コミュニケーションの世界では、他者の心のありようを自ら体感している。たとえそれが異常なほどに過敏にはあっても、である。

● ● ●  
心の成り立ちをめぐって

次に問題となるのは、心の成り立ちをどのように考

こばやし・りゅうじ  
大正大学人間学部臨床心理学科教授。粕江のんびりクリニック医師。医学博士。児童精神科医。専門は児童精神医学、乳幼児精神医学、関係発達臨床。九州大学医学部卒業。東海大学大学院健康科学研究科教授などを経て現職。著書に「よくわかる自閉症」(法研、二〇〇八年)、「自閉症とこころの臨床」(共著、岩崎学術出版社、二〇〇八年) など。

不可能である。

なぜ自閉症児の心の動きを感じ取ることが難しいのか  
心の成り立ちをこのように考えていくと、われわれがまずもつて問題として取り上げる必要があるのは、なぜわれわれは自閉症の子どもたちの心（気持ち、情動）の動きを感じ取ることが難しいのかということである。そこにはどのような関係の問題が派生しているのかということである。

もしもわれわれが彼らの心の動きを感じ取りながら関わるができるならば、彼らの気持ちの分化も進み、彼らの心も次第に育まれていくのではないか。われわれに彼らの心の動きを感じ取ることが難しくしているのは何か、その点を追及していくことが必要ではないのか。筆者が本稿のテーマを「われわれは自閉症児の心を理解しているか」としたのは、このような理由に基づいている。

### ● 関係欲求をめぐるアンビバレンスと情動の機能不全

自閉症の子どもたちとわれわれとの関係を困難にし

えているかということである。素朴に考えてみてもわかることだが、乳児は自分の気持ちのありようを知的に理解することはむずかしい。最初の段階では喜怒哀楽といった気持ちの分化さえも満足にはできていない。しかし、生まれて間もなく、泣き方も次第に分化し、空腹な時と眠い時では泣き方にも違いが表れる。その段階で乳児自身は自分の気持ちをいまだ理解してはいない（だろう）。そこで養育者は乳児の気持ち、つまりは情動の動きを自らの身体で感じ取って相手をする。乳児が今なぜ泣いているのか、何が不快なのか、乳児の気持ちを感知取りながら応じている。まるで養育者自身が乳児であるかのように、感じ取った（乳児の）気持ちを投げ返しながら相手をしている。成り込み（鯨岡、一九九七）と映し返し（ミラーリング）である。このような関わりでの体験の蓄積によつて子どもの情動の分化は促進されるとともに、子ども自身も自分の情動の動きの（文化的）意味に気づくようになる。

このような対人交流を日々蓄積していく中で、心は次第に形作られていくものであつて、子どもの中で自己完結的に自生してくるような性質のものではない。関係を抜きに心の問題を考えていくことなど原理的に

れていくことが期待される。このような支援のあり方をわれわれはこれまで「関係発達支援」と称してきた。

### ● 関係発達支援と ● その中で起こる関係の変容過程

この支援の最大のポイントは、子どものアンビバレンスを緩和するように働きかけることと、養育者の側の負の感情および負の関わりを減らすことである。つまりは、両者のあいだに生まれた負の循環を断ち切ることである。アンビバレンスを緩和する働きかけの中心は、それまでの養育者の過干渉的なあるいは一方的な対応をできるだけ控え、子どもの関心の向かうところをていねいに受けとめることである。

この対応が功を奏すると、子どもの関係欲求が前面に現れやすくなり、その結果、子どもの気持ちの動きをつかみやすくなる。子どもの気持ちが養育者につかみやすくなることによつて、養育者も子どもの気持ちを受けとめることが比較的容易になり、当初の関わりが難しいという感じが薄れ、好循環が生まれ始める。その中で子どもに少しずつ安心感が育まれていくようになる。子どもは外界に対して好奇心を持ち始め、

ているのは、子どもたちに認められる関係欲求をめぐるアンビバレンスである。このアンビバレンスのために、われわれとの関係に負の循環が生まれ、その結果様々な異常行動がもたらされる（小林、二〇〇八）。そして、負の循環が断ち切られない限り、このアンビバレンスは増強の一途を辿っていく。

このアンビバレンスは心の原初のかたちともいえる快／不快の分化さえ困難にし、情動の機能不全をもたらす。両者間に情動が共振するという本来の情動的コミュニケーションの成立が困難になるのである。

われわれが子どもたちの情動（気持ち、心）の動きを感じ取ることが困難であるのは、このような理由によるのであつて、子どもの側の要因（素質）か、われわれ養育者側の要因（環境）か、といった単純な二者択一の問題ではない。素質と環境が相互に複雑に影響し合った結果生まれるもの、まさに関係の問題なのである。

ここで示された関係の問題、つまりは関係障壁に対してなんらかの支援の手だてを考え、負の循環を断ち切り、好循環をもたらしうることができれば、関係は修復さ

積極的に外界との関係を持ち始めるようになる。

子どものそうした肯定的な姿は養育者の喜びとなり、養育者の前向きな育児姿勢を強めて、子どもとのあいだで何かを共有しよう、子どもの気持ちに添おうという姿が増えてくる。こうして好循環が本格的に巡り始めるが、その中で、関係欲求の高まりとの関連で、子どもの側にさまざまな表現意欲が湧いてくる。このような好ましい関係が生まれることによって初めて、子どもの本来の発達の道が切り開かれていくのである。

以上が関係発達支援によって期待される（子どもも「養育者」の関係の変容過程の骨格であるが、この基本姿勢に基づいた支援を通して、子どもたちにどのような形で「他者の心を理解する」ことにつながる心の動きが生まれてくるのであろうか。

ここでわれわれがこれまで取り組んできたMIU (Mother-Infant Unit) (小林、二〇〇〇)での経験の中からいくつか具体例を取り上げてみることにしよう。いずれも支援の中で親子の間に好循環が巡り始めた頃の印象的なエピソードである。

## ● 自閉症の子どもたちが垣間見せる ● 養育者を思いやる心

ひとつはすでに報告した事例である。関係発達支援開始後二十六カ月が経過した頃の母親の手記からの抜粋である（小林、二〇〇〇、一五四頁）。

翔太 当時五歳五カ月

（ある日、翔太と母親が手をつないで歩いていた時のこと）

細い道で後ろからバイクの音が聞こえた時、つないでいた手をそっと自分のいる空き地に寄せてくれた。危ないという理解と私へのやさしさを感じた。

公園の垣根を越える時、まず自分で先に行き、後に続く私のために枝や葉を分けてくれた。私への思いやりの心の成長がとてつもない。

いずれのエピソードもおそらくは日ごる母親が子どもに対して行ってきた振る舞いであろうが、それがいつの間にか子どもにも見られるようになっていったことが推測されるのである。

さらに最近、筆者は関係発達支援の一例を通した親

嬉しかった。  
「ありがと♡♡」って伝えて、おんぶしながら走って家の中に入った。

これらのエピソードから教えられるのは、養育者が子どもたちの気持ちの動きに沿った対応を丁寧に積み重ねていくことによって、子どもたちは養育者との一体感を体験し、安心感が育まれていく。子どもたちの主体性を重んじる支援の結果がこのような感動的なエピソードへとつながっていったのではないか。まずはわれわれが子どもを思いやることをせずして、子どもたちにそのような心が生まれるはずはないということである。

ではこのエピソードで示されている子どもたちの他者を思いやる心と「理解すること」とはどのような関係にあるのであろうか。

## ● 情動的コミュニケーションと ● 身体を通して理解すること

冒頭で「理解すること」の二重性について指摘した。理解するということはまさに関係そのもの、つま

と子の関係変容過程の詳細な検討を試みた（小林、印刷中）。その中で印象的なエピソードを母親の手記から抜粋してみよう。

関係発達支援開始後、十一カ月が経過した頃である。

拓太 当時四歳十一カ月

十一月の寒いある日。

風邪を引き熱が上がってきた拓太をおんぶしてお店に忘れ物を取りに行った。自宅へ戻ろうとした時、突然大雨が降ってきた。私は工場の中に傘はないかと探したが見つからなかった。拓太はフード付きのウィンドブレーカーを着ていたので、拓太を台の上に立たせ、「濡れないようにかぶろうね」と言いながら、フードを頭にかぶせ、拓太をおんぶして歩こうと外に出ようとした。その時、私の頭に何かがぶつつかぶさってきた。私もフード付きのトレーナーを着ていたが、拓太は何も言わず、私にもフードをかぶせてくれたのだ。

拓太がこんなことをしてくれたことは今までなかったから、意外だったし、驚いた。

拓太の優しい気持ちに触れて心が温かくなった。

りはコミュニケーションの問題である。コミュニケーションの発達過程を考えるとすぐにわかるように、こ  
とばや身振りを介したコミュニケーションが成立する  
以前から子どもと養育者間には情動的コミュニケーションが脈々と息づいている。身体、情動、気持ちを  
通した理解とでもいえる性質のものである。

この情動的コミュニケーション、つまりは最初の段  
階でのコミュニケーション世界にあつては、身体と身  
体、あるいは情動と情動が共振し、そこにある気持ち  
や考えが共有される関係が生起する。文字通り「共  
感」の原初のかたちといえるものである。「身体を通  
して理解する」とはこのような性質のものである。

「知的に理解する」とは、「身体を通して理解」した  
体験を言語化すること、つまりは体験の認識の問題で  
あるが、ここで重要なことは、身体を通して体験とそ  
の認識過程との間には大きな溝やずれが生まれやすい  
ことである。自ら初めて身体を通して体験したこと  
を、その時当事者本人のみでは、正しく認識する手立  
てを持ち得ない。必ずそれを共に体験してくれる他者  
がいて、その（文化的）意味を言語化してくれること  
が不可欠である。そこで初めて、当事者本人も（こ

ばによって）認識することが可能になっていくはずで  
ある。

発達過程を考えた時、自明なことであるが、「理解  
すること」ができるようになるのは、「身体を通して  
理解すること」が先にあつて、ついで「知的に理解す  
ること」ができるようになるのであつて、けつしてそ  
の逆ではありえない。

先に指摘したような具体的なエピソードは、子ども  
たちが母親への思いやる心をことばでもって表現して  
いるわけではないが、明らかにともに体験した母親  
は、自分を思いやつてくれる子どもの心を確信をもつ  
て感じ取っているはずである。

先に心の成り立ちを考える際に取り上げたが、この  
ような他者を思いやる心が子どもたちに生まれるため  
には、まずもってわれわれ養育者が子どもたちの心の  
動きを感じ取り、その意味を映し返していくという養  
育的関与の積み重ねがせひとも必要になる。そうであ  
るとするならば、われわれは自閉症の子どもたちの心  
の動きがどのようなものか、まずはそのことを素朴に  
感じ取ることが何より大切になるのではないか（小  
林・原田、二〇〇八）。

## ● おわりに

● ● ●  
常々自閉症の子どもを理解することが難しいといわ  
れて久しい。本当にそうであるのか。これまで筆者は  
MIUでの臨床を通して、親子の関係のありようをつ  
ぶさに観察していく中で痛感してきたことのひとつ  
は、子どもたちは自らの存在すべてを用いて、自分の  
気持ちのありようを常に表に現していることである  
（小林、二〇〇八b）。

人間相互理解には、身体あるいは情動といったもの  
が深く関わっている。二者間で一方の人のからだの動  
きや情動の響きは、他方のそれに共鳴していく。人間  
相互理解の原初的形態である。われわれのからだは  
元々そのような働きを備えている。このことは言語的  
体験とは異なり、意識化することが困難であるがゆえ  
に言語化しにくい。それはこの性質上当然のことだ  
であるが、いままら言語化するまでもなく、われわれに  
とってはもつとも実感として捉えられる体験であつた  
はずである。しかし、今やわれわれのからだは死に瀕  
し、からだを通したコミュニケーションは容易には成

立しがたい状況にある（竹内、一九八三）。

本稿のテーマを「われわれは自閉症児の心を理解し  
ているか」としたのは、われわれが子どもたちに対し  
て身体や情動を通してコミュニケーションによって理  
解することができているかという問題提起でもあつ  
た。われわれ自身が子どもの気持ちを感じ取ることな  
くして、子どもの心が育つはずもない。子どもの心は  
治療によって治すことができるようなものではなく、  
育てる側のわれわれが文字通り養育するという営みに  
よって初めて子どもの心は育つのである。人間の心は  
関係の中でしか育まれていくことはないからである。  
本来であれば、（子ども―養育者）関係が変容して  
いく過程で、子どもたちに「他者の心を理解する」心  
がどのようにして育まれていくか、このことを論じる必  
要があつた。しかし、このテーマを論じるには余りに  
紙幅が不足している。それは別の機会に論じているの  
で参照していただければ幸いである（小林、印刷中b）。

## 【文献】

Baron-Cohen, S., Leslie, A. M. & Frith, U. (1985). Does the autistic  
child have a "theory of mind"? *Cognition*, 21, 37-46.

- 小林隆児「自閉症の關係障害臨床——母と子のあいだを治療する」  
ミネルヴァ書房、二〇〇〇年
- 小林隆児「自閉症とこぼの成り立ち——關係発達臨床からみた原  
初的コミュニケーションの世界」ミネルヴァ書房、二〇〇四年
- 小林隆児「ストレンジ・シチュエーション法からみた幼児期自閉症  
の対人關係障害と關係発達支援」、数井みゆき・遠藤利彦(編)  
「アタッチメントと臨床領域」ミネルヴァ書房、二〇〇七年、一六  
六一—一八五頁
- 小林隆児「よくわかる自閉症——「關係発達」からのアプローチ」  
法研、二〇〇八年 a
- 小林隆児「子どもは全存在を通して自分の気持ちを表に現わしてい  
る」、『精神療法』第三四巻第四号、二〇〇八年 b、一〇〇—一〇一頁
- 小林隆児「關係発達臨床からみた共同注意」、『乳幼児医学・心理学  
研究』、印刷中 a
- 小林隆児「自閉症とこぼのそだち——親と子の關係発達支援」岩  
崎学術出版社、印刷中 b
- 小林隆児・原田理歩「自閉症とこぼの臨床——行動の「障壁」か  
ら行動による「表現」へ」岩崎学術出版社、二〇〇八年
- 鯨岡峻「原初的コミュニケーションの諸相」ミネルヴァ書房、一九  
九七年
- 竹内敏晴「子どものからだとは」晶文社、一九八三年

■ご案内■  
国際シンポジウム

「子どもの心のケアの現場で役立つ心理専門職とは  
——チーム支援における臨床心理士の役割——」

日 時：2008年10月12日(日) PM1:00~6:30  
会 場：東京大学(本郷) 安田講堂 (同時通訳付)  
主 催：東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース  
内 容：I部 招待講演「子どもの心のケアにおける心理専門職の役割」  
Paul Stallard「子どもと若者に関わる臨床心理士の役割と機能：  
英国の経験から」、村瀬嘉代子「日本における子どもの心のケア  
の課題と心理専門職の役割」  
II部 話題提供「子どもの心のケアに関わる心理専門職への要望」  
児童精神科医療の立場：金生由紀子、児童福祉の立場：伊達直  
利、家族の立場：山岡修、行政の立場：厚生労働省関係者  
III部 招待講演者2名+話題提供者4名による討論  
受 講 料：2,000円(学生1,500円) 定員：1,000名(定員になり次第締め切り)  
申込など：ホームページを参照。 <http://www.p.u-tokyo.ac.jp/shimoyama/>

特集1・他者の心を理解することは

絵本が切りひらく他者の心へのイメージ生成

佐々木宏子

ささき ひろこ  
環太平洋大学教授。専門は乳幼児教育学。立  
命館大学文学研究科修士課程修了。専門教育  
大学教授定年退職を経て現職。著書に「絵本  
は赤ちゃんから」(新曜社、二〇〇六年)、  
『絵本の心理学』(新曜社、二〇〇〇年。韓国  
語版、二〇〇四年)、『新版 絵本と子どもの  
こころ』(JULA出版局、一九九三年)な  
ど。

●● 絵本を通して他者の心を  
理解するための二つの方法

絵本は絵が中心のメディアであるため、どのような  
ジャンルであろうとも人の心がにじみ出てしまう。例  
えば、おとなのための科学絵本であれ、図鑑的な要素  
を含む幼い子どものための「かがくえほん」であれ、  
そこには作家や画家の対象物への想いが描き込まれて  
いる。それは、絵という具体であるがゆえに、言葉以  
上に明瞭な直截性で人の感情を現してしまふ。またそ  
れは、選ばれた画材(水彩・油彩・ペンやクレパスなど)  
や手法の中にも否応なく反映されるだろう。

科学絵本ですらそうなのだから、ましてやそれが人  
の心を描く物語絵本の場合は、いつも他者の心の多様  
な存在に、気づかされる機会となる。私は、読み手が  
一冊の絵本と出合った場合、二つの意味で他者の心に  
触れ合うと考えている。

一つは、おとなであれ子どもであれ、読み手が絵本  
の中に描かれた人(他者)の心をどのように解釈した  
のかということ。もう一つは同じ絵本を他者(読み聞  
かせしてくれる人も含む)が読み、自分とは異なるどの  
ような意味づけをしたのかを知ることである。後者の  
場合、幼い子どもは自分の力だけでは絵本を読むこと  
ができないため、絶えず経験している問題である。